



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道における外国籍園児の現状：幼稚園に対する聞き取り調査をもとに
Author(s)	宮内, 洋
Citation	北海道大學教育學部紀要, 68, 177-190
Issue Date	1995-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29483
Type	departmental bulletin paper
File Information	68_P177-190.pdf



北海道における外国籍園児の現状

—幼稚園に対する聞き取り調査をもとに—

宮 内 洋

The Report of Current Survey about Children of Non-Japanese Nationalities in Kindergartens of Hokkaido

Hiroshi MIYAUCHI

は じ め に

1991年末に日本国内で外国人登録をした人は120万人を越えた。つまり、日本は法的にカウントされている「外国籍」の人だけでも、列島内にはほぼ百人に一人の割合で住んでいるという新しい時代に入ったのである。

「バブル」と表されていた好景気時においては、職場での労働力不足を背景に、外国人人口は急速に増加していた。あまりのその増加ぶりに対する臆げな危機意識を根底にしたかのように、「外国人」を対象とした数多くの研究がなされてきた。その場合、「外国人」とは日本に出稼ぎにやって来た労働者であるということが半ば“常識”の感すらあったように思われる¹⁾。しかし、外国人は労働する側面を持ちつつもそれだけではなく、当然のことながら、各々の“生活”をもった人間なのである。私たちは同じ地域内に居住しながら“生活”の一部を共有しているのである。

確かに、日本を“仮の宿”とみなす外国人もいるのかもしれない。しかし、彼／かの女に子どもがいる場合、親にとっては単に“稼ぐ場”や“仮の宿”であったとしても、子ども自身にとってはかけがえのない“発達の場”であることを忘れてはなるまい。

北海道においては筆者の知る限り、このような視点により実態調査をもとにした研究はほとんどなされてはこなかった。本報告はそのような状況を踏まえたくて、外国籍園児に関する調査結果の概略を一日でも早く示すことを目的とするものである。今後さらなる調査を予定していると同時に、より詳細な分析は後の機会に譲ることとしたい。

方 法

1994年度の学校基本調査において、北海道の外国籍園児は35人となっている。

調査方法としては、この35人の園児が在籍する幼稚園に研究の趣旨を記した手紙を送付した後、筆者個人が直接お話をうかがった²⁾。調査期間は1995年3月中のおよそ一カ月である。各々の幼稚園にてお話をうかがう中で、先の学校基本調査においては記されていない外国籍の園児が在籍する幼稚園も知ることが出来たと同時に、お話をうかがうことも出来た。各幼稚園には、

在籍する外国籍園児一人一人に関して、大まかに以下の3点に関するお話をうかがった。

- a) 子ども本人の国籍と家族に関して
- b) 子どもの幼稚園での生活に関して
- c) 幼稚園側の子どもへの対応に関して

基本的には、直接園児を受け持たれた／ている担任教諭にお話しをお聞きするように努めた。しかし、すべての幼稚園においてそのようにお聞き出来たわけではなく（話をうかがった担任の先生はすべて女性）、園長先生や主任の先生方にお聞きした場合もあった。また、すべての幼稚園に直接伺って直にお話しをお聞きすることがもっとも望ましい姿であると考えられるが、かなわず電話でうかがう場合もあった³⁾。

調 査 結 果⁴⁾

1. 日本における外国籍園児の人数推移

外国籍園児の年度毎の人数の移り変わりを見る前に、日本国内の園児数の推移を見ていきたい（図1）。1978年をピークに日本国内の幼稚園に通う子どもの人数は年々緩やかではあるが減少している。一方で外国籍園児の人数は、近年では1992年からは逆に前年よりも240人が増えて一時増加の兆しを見せたが、再び緩やかに減少している（図2）⁵⁾。この二つを比較すると、園児数が急激な増加傾向を見せる1970年代では、逆に外国籍園児の人数は反比例するかのように減少していることがわかる。また、日本国内の公立幼稚園に通園する園児の人数はほぼ変わらずに推移しているが、一方の外国籍園児の私立幼稚園に通園する人数がほとんど増減しないかわりに、公立幼稚園に通う人数が年毎にかなり上下している。この増減によって、外国籍園児の人数が決まっているかのように見える。これより、公立幼稚園への入園を抽選等により許可されなかった外国籍の子どもは幼稚園に通うのを断念するか、幼稚園以外の保育・教育施設に通っていたと考えられるかもしれない。

2. 北海道における外国籍園児の概況

先述のとおり、1994年5月1日現在の北海道の幼稚園に在籍する外国籍の子どもは35人である（平成6年度学校基本調査報告書）。北海道における園児の総人数が80,235人であるので、外国籍園児は全体の約0.04%に過ぎない⁶⁾。しかし、この外国籍園児の人数は一年を通して固定したものではないことが今回の調査から明らかになった。各幼稚園での年度途中の入退園などによる人数の変動が激しく、毎月毎に外国籍園児の人数は変化していた。1994年度においては、もっとも多かった時期では40人の外国籍園児が在籍していた⁷⁾。

以下、調査の結果として記述していくのは、1994年12月1日の時点で外国籍園児が在籍する23の幼稚園と、在籍していた外国籍園児40人についてである。この40人の内訳は男児19人：女児18人：不明3人で、年齢は3歳児12人（女4／男8）：4歳児12人（女6／男6）：5歳児13人（女6／男5／不明2）：不明3人（女2／不明1）となっている。

(単位：万人)

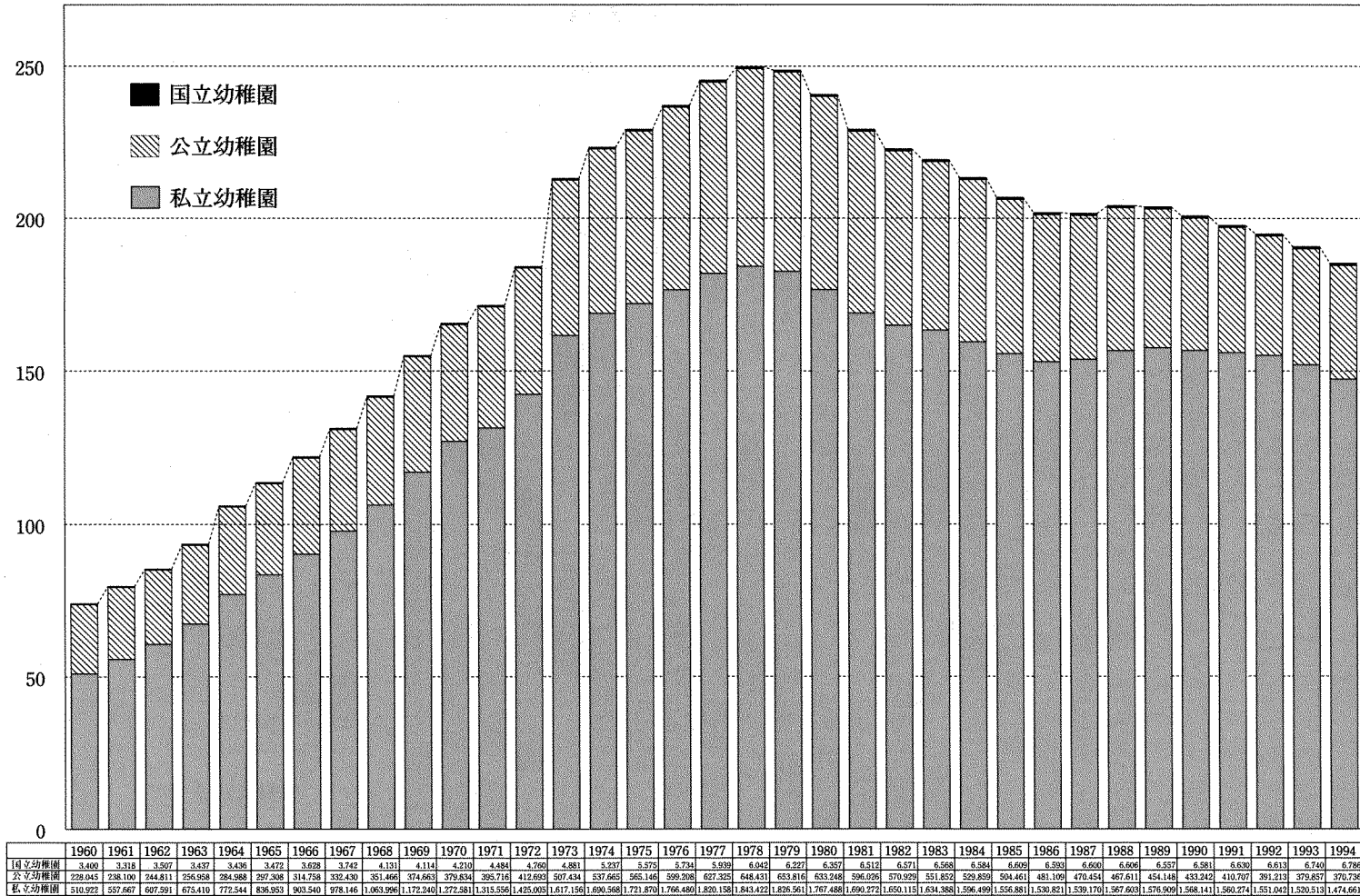


図1 日本国内における園児総数（学校基本調査報告書より作成）

(単位：人)

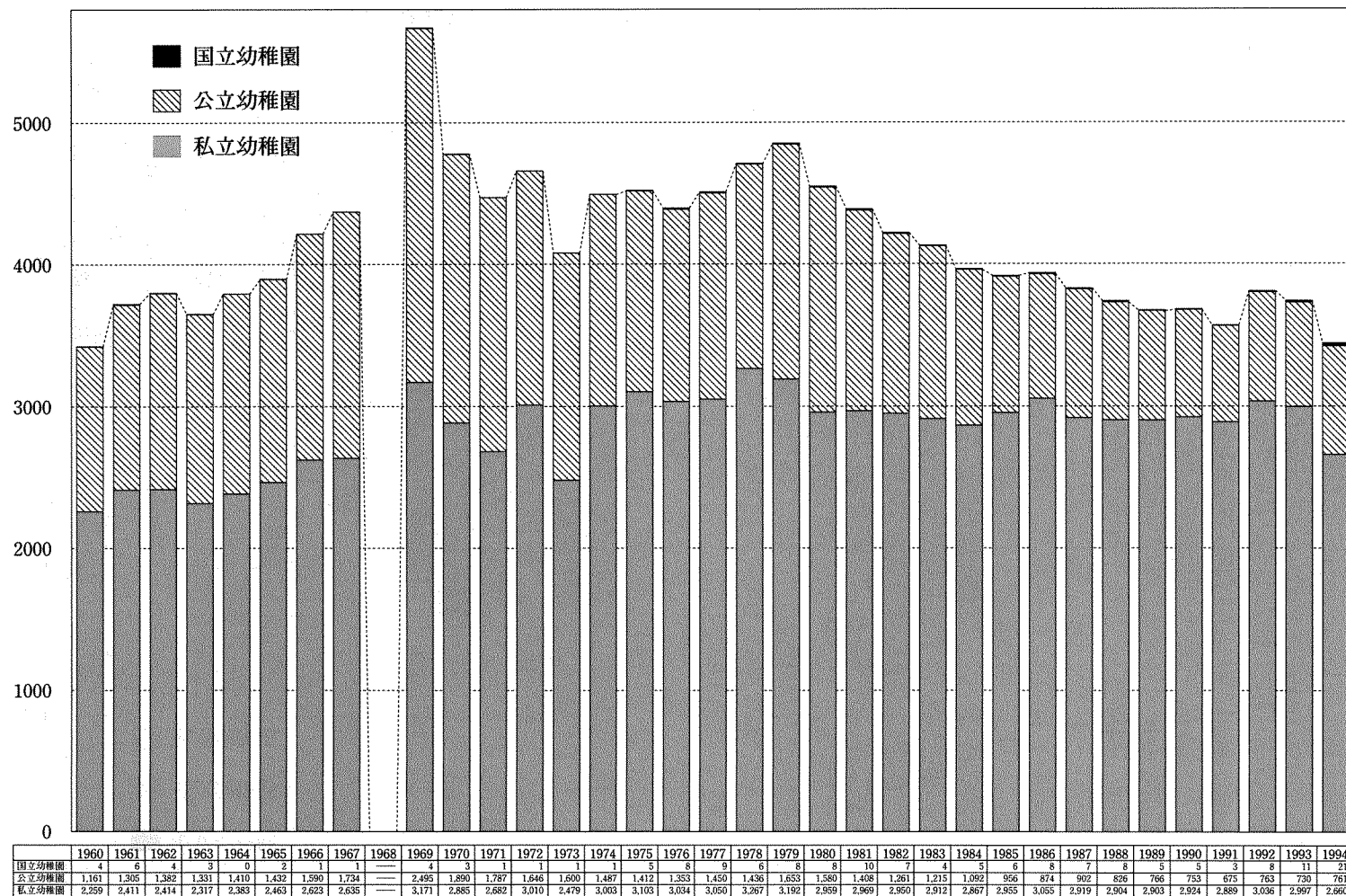


図2 日本国内における外国籍園児数（学校基本調査報告書より作成）

*1968年については、報告書そのものに外国籍園児人数の記載がされていない。

a) 子ども本人と家族に関して

〔国 籍〕

外国籍園児の国籍は、ロシアを含めたアジア地域内にある国が40人中28人と全体の7割を占めていた。そのうち、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）と大韓民国（以下、韓国）を合わせた人数は21人ともっとも多く、全体の半数以上を占めている。以下は、地域毎にアメリカが4人、オセアニア3人、アフリカ3人、ヨーロッパ2人となっている。

〔地域分布〕

地域別に見ていくと、札幌市が13人（うち1組がきょうだい）ともっとも外国籍の園児が多い市であった。あとは苫小牧市が6人（うち2組がきょうだい）、函館市が5人と続いている。各々の地域の外国籍園児の人数は、以下の〔表1〕に示すとおりである。

〔表1〕 地域別外国籍園児数

地 域	石 狩	胆 振	渡 島	上 川	空 知	後 志
人 数	16	12	6	3	2	1

〔家族背景〕

子どもたちの親の職業や国籍などは個人のプライバシーに深く関わることなので、幼稚園ではあまり聞くことはできなかった。そのため、特にこの項に関してはうかがうことが出来た範囲内に限定されるのだが、父親の職業でもっとも多かったのが国公立大学への留学生であった。以下、宣教師、遊技場経営と続いた。

最近日本にやって来た人たちは、期間が限定された留学や仕事を目的としていた。その中には、母親が働くために保育時間が長い保育園に移らねばならない場合も見られた。

また、全体の半数以上を占める国籍が北朝鮮と韓国である子どものうちの大半は、日本で生まれ育った子どもであった。

b) 子どもの幼稚園での生活に関して

〔在籍する幼稚園〕

まずは、子どもたちが通園する幼稚園について見ていきたい。

外国籍園児が在籍する幼稚園は23園にわたっているが、その中に国立の幼稚園はなく、公立が4園、私立が19園である⁸⁾。幼稚園の規模としては、園児の総数が50人以下の小規模園は1園のみで、在園児数が100～150人の幼稚園がもっとも多く、51～150人規模の幼稚園が全体の半数以上を占めた⁹⁾。

また私立の幼稚園のうち、キリスト教系の幼稚園（プロテスタント／カトリック）が半数近くであったことも指摘しておきたい。

〔子どもの様子〕

多くの子どもたちにとって、幼稚園という“場”は、家庭という慣れ親しんだ空間とは異なっ

た継続性をもつ「社会的空間」として立ち現れる。そこでは、自らの意思を相手に対して伝えることが可能か否かということがきわめて重要な意味をもつことだろう。そこで、この40人の園児について、入園時に日常生活に支障がない程度には日本語を理解することができると同時に話すこともできたか否か、という観点で二つのグループに分けることができる。①日本語が駆使出来る言語ではなかった園児が14人、②日本語が日常生活レベルで駆使出来た園児は26人であった。

①においては、国籍が地域別にアジア6人、アメリカ4人、アフリカ2人、オセアニアとヨーロッパがそれぞれ1人で、その中では英語を母語とする子どもが半数の7人ともっとも多かった。特にアメリカから来た子どもたちはすべて日本語がまったくわからない状態で入園している。

②においては、国籍がアジア各国である子どもが22人ともっとも多かった。そのうち、アジアの中でも北朝鮮と韓国を合わせた子どもの人数は20人とその大半を占め、先の①において中国とインドネシアが多かった結果とは異なっている。②に関しては、日本で生まれた子どもたちがおよそ4/5を占めており、その子どもたちに限って言えば日本語が母語である可能性が高いと考えられる。

(1) 園児同士の人間関係

ここでは、先の①に焦点を合わせたい。この子どもたちは、外見において周囲の大半の子どもたちとは異なっている場合が多い。例えば、その子どもたちの大半は髪の毛や目そして肌の色が異なっている。周囲の園児たちはまずそのことに興味をもち、言葉が通じないことに対してはそれほど大きな問題とは映らないように見える。中には、ある外国籍園児が周囲の園児たちの間で「取り合いっこ」になったという珍しいケースもあった。「大きなリボンをつけたお人形」のようなその女兒をめぐって、園児たちは親からその子の出身国の言葉を習って、競い合うようにして話しかけていたという。これなどはきわめて稀な例であろうが、あるベテランの先生が話されていたことによると、子どもたちは言葉が通じなければ、それぞれ自分なりに工夫した表現方法でコミュニケーションをとる姿が垣間見られたということである。

他方、外国籍園児にとっては自らの意思が伝わらないもどかしさは計り知れないものがある。例えば、母親や先生から離れなかったり、感情を周囲にぶつかけたりと、その子ども自身のパーソナリティーに応じた表現方法によってその気持ちを示していたようである。このような時期は、多くの先生方のお話が図らずも一致した点であるのだが、およそ一カ月間であり、それを越えると状況は変わってくるようである。子どもたち自身が日本語を覚えるにしたがって、周囲の園児たちと遊ぶようになる。と同時に、そのやりとりの中でますます日本語を覚えていくという好循環で、子どもたちの間では、その子どもが外国籍であろうとなかろうとそれは何の問題ではなくなっていく、というのが共通した先生方の説明だった。

しかし、①において、髪や目や肌の色が周囲の大多数の子どもたちと同じ場合は事情が異なる。多くの日本国籍園児たちにとって、自分たちとは言語や習慣などが異なる文化が同時的に多様に存在することを理解するのはかなり困難なようである。“外見の違い”から“言語の違い”へは理解が容易に進むようだが、同一人物において《自分たち》と“外見は同じこと”と“言語は異なること”との共存は認識のレベルにおいて成り立ちにくいように考えられる。ここで、それをよく表しているケースを記したい。いわゆる「縦割り保育」を実践している幼稚園でのエピソードである。この「縦割り保育」とは、異なった年齢の子どもたちで構成されたクラスで保育・教育する形態のことであり、実践している幼稚園は現在のところ少数である。

Aちゃんは一人っ子の女兒である。中国から父親の会社の転勤で最近、家族3人で北海道にやって来た。父親の職場の同僚（日本人）が薦めるにしたがって、子どもたちの自主性を重んじるプロテスタント系の幼稚園に入園した。そこには幼稚園の専用バスで通園するのだが、最初はバスに乗るときには必ずと言っているはずと「大泣き」していた。そこで相談のうえ、幼稚園に慣れるまでは母親が教室に入ることになったのだが、Aちゃんはずっと母親にくっついたままだった。母親が幼稚園に来なくなった後もしばらくは担任の先生にくっついてた。その後は、同じクラスの年少の子どもの面倒をみることを媒介として、他の同年齢の子どもたちとも関わっていった。

Aちゃんは入園当初は日本語があまり話せなかったらしい。しかし、いくらAちゃんの言葉が「片言」でも、いわゆる「縦割りクラス」においては、あまりうまく話すことが出来ない年少児が少なくなく、Aちゃんの「片言」の日本語はほとんど目立たなかったと担任の先生は話された。しかも、Aちゃんは入園当初は幼稚園でも「大泣き」していたが、年少児がいたところで同様に「大泣き」していたために、Aちゃんだけが目立つことはなかったらしい。そして、Aちゃんに対して、年長の子どもになると「何か変だぞ」とピピッとくる子もいると思うけど、縦割クラスの雰囲気にかき消された」というのである。

この担任の先生の言葉は日本の多くの幼稚園の雰囲気をよく表していると思う。つまり、外見적으로는同じでも、言葉などが《自分たち》とはわずかでも異なれば、多くの日本国籍の子どもたちは「何か変だぞ」と感じてしまうのである。この「何かが違う」と子どもが感じた後で、外国籍の子どもが《自分たち》とは異なるということに対して、日本国籍の子ども一人一人がいかなる感情を持つのかについては、より微細な分析が必要となるであろう。

(2) “言葉の壁”とその克服

上記のとおり、外国から来たばかりの子どもたちは、自らの意思を伝えることが出来ないという苦痛を抱えている。

多くの場合、周囲の子どもたちの自発的な配慮と同時に、諸外国から来た子どもたち自身も独自の工夫をしていた。例えば、クラスの他の子どもたちが言った言葉をいつも繰り返していた子どもがいる。そのことを通して、彼は場に応じた日本語の使い方を短期間で身につけていくことが出来たのである。彼と同じように、周囲の子どもたちの言動のまねをする子どもは多かった。

中には、日本に来た限りは日本語を覚えなければならないという「悲痛な使命感」を背負っているように担任の先生が感じておられた、韓国から来た子どももいた。先生方の話を通して、親たちが留学のために滞在している場合、子どもは子どもなりに覚悟をして来日している姿が浮かび上がってきた。「お父さんも言葉の通じない日本で一生懸命頑張っているよ」という先生の言葉に、「帰りたい」ということをそれ以降一切口にしなくなった留学生の子どももいた。

一方で、「僕はアメリカ人だから」と日本語を覚えるのを頑に拒んだ子どももいた。話をうかがった範囲では、そのような子どもはいわゆる「先進国」から来た「白人」の子どもに限られていた。しかし、日本で生活する限りは言葉をはじめとして日本文化を身につけさせたいと幼稚園側に要望する「先進国」から来た親も一方でおり、生活する地域に対する家族の考えが大きく影響するように考えられる。

子どもたちの日本語の習得においては、テレビのアニメ番組が大きな役割を果たしていることも付け加えておきたい。アニメ番組を観ることによって、「まさに日本語を吸収している」とある

先生は話されていた。

c) 幼稚園側の子どもへの対応に関して

[幼稚園側の機関としての対応]

まず、子どもの国籍とは関係なく、幼稚園全体として、その子どもが「外国籍」とは考えずに「他の子どもたちと同じように」接したとお答えになる幼稚園が半数近くあり、それらの幼稚園は「他の子どもたちとまったく変わらないので、何の問題もない」とお答えになっている。その場合は、子どもの国籍が北朝鮮もしくは韓国の場合が大半であった。

一方で、幼稚園として個別に対応しているところも少なくない。幾つかの私立幼稚園では、親が北海道の国公立大学に留学のためにアジアあるいはアフリカ諸国からやって来た子どもたちを対象に、入園料と毎月の保育料を免除もしくは減額していた。園での制服を「“お古”で構わないのでしたら」と貸し出していた園もあった。そのような取り組みを行うのはキリスト教系の幼稚園が多く、日頃からバザーでの売上をアジア諸国に送金するなど、園長先生自身がアジアのために何かを行いたいと考えている場合がほとんどであった。

また、子どもたちをその実年齢とは異なったクラスに入れる場合も見られた。中には本人が3歳児であるのに関わらず、年長のクラスに入れる場合もあった。この幼稚園は、母語の日本語が曖昧で「赤ちゃん言葉」の残る年少のクラスよりも、年長のクラスの中で“正しい日本語”をしっかりと身につけさせたいという理由でクラスに入れたのである。またこの3歳児の不安を取り除くために姉が在籍する年長のクラスへ特別に入れたという意味合いも大きいと考えられる。

別の幼稚園では、海外の教育制度を念頭において、母国に帰国したときに対応出来るように配慮して、3歳児を年中のクラスにシフトさせていた。この幼稚園は、教員スタッフに外国人の教諭を入れたりするなど国際的に通用する人間を育てることを教育理念に、世界的な視野のもとに運営されていた。

[先生個人の対応]

(1) 問題の所在

教育現場で直に園児と接する担任の先生方にとっても、先にも示したとおり、やはり“言葉”の問題がもっとも大きかったようである。言葉の壁は、園児同士の間にあった壁よりも、母語の異なる園児と自身との間にある壁の方が先生方には厚く感じられたようである。子どもたちが時間の経過とともにいくつもの違いを超えて遊び始めることを、多くの先生が羨ましそうにお話しされていたように筆者は感じた。また多くの先生が、外国から来た子どもたちに対して、他の園児に比べるとどうしても深い部分まで理解することが出来ないもどかしさを感じていると話された。

言葉の問題は、子どもたちだけに限られることではないようである。毎日のように幼稚園やクラスで出される「クラス通信」といった配布物は、日本語がわからない親たちにとってはまさに“暗号文”である。先生方は通信等で連絡していても、幼稚園が休みの日に子どもが登園したり、「お弁当の日」でもないのに子どもが弁当を持って来たりしたというエピソードは数多くお聞きした。

さらに、親同士の間でも、言葉に端を発する問題が生じていた。ある幼稚園では、親は必ず何らかの係を担当しなければならないのだが、東南アジアから来たばかりで日本語がまだ不慣れた

母親は係の話し合いの場に呼ばれることはなかったという。母親たちはかの女に一つ一つ説明するには時間がかかってしまうので、どうやら早く終わるために“好意で”声をかけなかったらしい。このような話から、母親たちの間で子どもの話も出来ず、地域との結び付きもなく孤独に家の中に佇む外国から来た数多くの母親の姿が浮かび上がってくるように思われる。

また、生じた問題は文化の違いとして認識されている場合も多かった。例えば、はっきりと自己主張する。喜怒哀楽が激しい。感情をダイレクトにぶつける等。以上は、先生方が教育現場で外国籍の子どもたちに対して戸惑った点であるが、なぜか「白人」の子どもにしか与えられない表現である。

今後外国からやって来た子どもたちが増えれば数多く経験されることになると考えられるのが、宗教に密接に関わる問題であろう¹⁰⁾。先生方のお話の中にとっても多く出てきたのは、イスラム教を信仰する親が幼稚園側に「自分の子どもに豚肉を食べさせないようにしてほしい」と要望するケースであった。道内の幼稚園において、ジャガイモを園児たちで栽培して、秋には「収穫祭」として豚汁を皆でつくって食べることはそれほど珍しいことではない。イスラム教を信仰する親たちにとって、通信に記された「豚汁」の文字はかなりショッキングなようである。先生方は親の要望通りに、その子どもには豚汁を回さなかった。しかし、親の要望など知らない子どもは、「自分が日本人ではないから一人だけもらえないのだ」と思い込んでしまったという話も聞いた。

最後に、ある先生のセンシティブな話を記したい。朝鮮籍をもつ日本で生まれ育った女兒を受け持っておられる担任の先生の話である。かの女が朝鮮学校に通っている姉のことをクラスで先生に話してくれることがある。かの女はいわゆる「日本名」(通名)ではなく「本名」で通園しているのだが、他の園児たちに朝鮮学校とはどういうところなのか説明を求められたときに、どのように、そしてどこまで説明していいのか、先生は考え続けたという。各々の家庭について、子どもたちへ親が望む“生き方”を熟知しなければ、対応出来ない問題であろう。

(2) 問題の解決に向けて

先生と外国籍園児のはざまにある言葉の壁は放置されたわけではない。各々の先生方の創意工夫によって壁は取り払われ、子どもたちは日本語を体得していった。例えば、ある先生は座るときには「すわる、すわる、すわる」と何度も繰り返して言ったというように、行為をすべてゆっくりと日本語で繰り返して口に出すという作業を行うことによって、子どもの理解を図っていった。

子どもの出身国の言葉での挨拶を取り入れる先生は多かった。登園時と帰宅時には必ず、その子どもの国の言葉で声をかけるという園長先生もおられた。中には、最初は他の「日本人」園児と同じように接していたが、母親から自分の国の文化を大切にしたいという話を聞いてからは、日本で生まれたその子どもに「アンニョンハセヨ」(朝鮮半島の挨拶の言葉)と声をかけるようにしていると話される先生もおられた。しかし逆に、別の先生は「アンニョンハセヨ」と挨拶したところ、韓国から来たばかりの園児は困惑した表情を示したという。どうやら、その子どもは日本で日本語でない言葉を口にすると思われられると苛められると思っていたということであった¹¹⁾。単に子どもの国籍と対応した言葉を話すだけではなく、重要なのはその子ども自身への理解であることを示すエピソードのように思われる。

また、先生方が外国籍の子どもを受け持つ中で注意した点の一つに、クラスの園児の親たち全

員へ配慮を求めたことが挙げられる。当然、先のような孤立した母親を生まないためにである。このことは母親自身のためであると同時に、それは子どものためでもある。ある園長先生は「親同士の繋がりが出来ると子ども本人の行動範囲が一挙に拡大する」とおっしゃっている。

このような先生個々人の取り組みは、園児たちの親を通して、地域の繋がりを生んでいるように思われる。そして、この繋がりは先生方に支援というかたちでフィードバックされているのではないだろうか。例えば、国公立大学近辺の幼稚園においては、在籍園児のなかには親が大学教官である場合も多い。留学やフィールドワークなどの海外滞在経験をもつ彼／かの女が果たす役割も重要であり、助けられたと感じる幼稚園の先生も少なくなかった。また、先のAちゃんの幼稚園からのお便りを父親の会社の同僚が中国語に翻訳していたというエピソードに表れているように、職場の仲間のサポートも見逃すことはできない。

(3) 自己を振り返って

幼稚園の先生方が上記のような対応を行うのは、先生方自身の実体験から得られたことと共鳴するところが大きいからである場合が少なくはないようである。ある先生は、自らの海外滞在体験のなかで言葉の通じない状況がいかに苦しいのかを身をもって思い知らされたと話された。また、英会話を習っていたときにその外国人の先生から「ガイジン」と呼ばれるのがいかに嫌なものかという話を聞いたのを機に、その先生に幼稚園では英会話を教えてもらい、園児たちには外国人を自分たちと同じ人間ということがわかるように教えていると話された園長先生もおられた。

多くの場合言語に関しては問題点として先生方に把握されているが、それらは一概に言語の問題だけではないのではないかと思い始めた先生もいる。ある先生は「最初はその子どもの国の言葉を覚えたり、みんなの前で使ったりしていたけれど、毎日同じ空間で一緒に過ごすことが大切だということがわかった」と話された。このように、外国籍の子どもと向き合うことによって、幼稚園での教育を異なった視点から見始めた先生もおられる。

このような視点は、他の日本の園児たちにも向けられる場合がある。アメリカから来て間もない自己主張の強い子どもを見ているうちに、自分のクラスでは友達のまねをする子が多いことに気づき、「クラスを受け持つ側においてはクラスは一つにまとまっていた方が楽だけど、一人一人が自分を出せるようになって『人と違っても良いんだよ』と言えるように早くなりたい」とおっしゃる先生もおられた。

ある幼稚園では次のような話をうかがった。そこではキャラクターがついている手袋がごく当たり前となっており、何のキャラクターが自分の手袋についているのかということ自体が、子どもたちの間では会話のテーマの一つになるほどだった。そのような中、園長先生は東南アジアから来た園児に「(手袋に) ミッキーさん(筆者註: ミッキーマウスのこと)がついてなくて、可哀想だね」と軽い調子でつい話してしまったという。しかし、その子は園長先生に向かって「手袋は暖かければ良いんだよ」と答えた。園長先生はそのときハッとさせられたと筆者に話して下さった。

また、なぜ身体検査ではクラス全員が一斉に服を脱ぐのかなど、アメリカからやって来た女兒が「おかしい」と思ったことについては一つ一つ疑問を投げかけるので、一つ一つのことに対して意味を考え始めたという先生もおられた¹²⁾。

直前のエピソードなどは幼稚園教育のみならず、今まで「常識」に埋もれて見えなかった「日本文化」を掘り起こし、「当たり前」だからという一点の理由のみで続けられてきた文化を相対化

するという視点にまで広がっている。

最後に、園長先生が自らの人生を振り返って外国人との関係をお話しして下さることが少なくなかったという事実を付け加えておきたい。先生方は戦時中の体験談を語るという形式を借りながら、差別される他民族の同年代の人々に対する同一化、旧植民地において終戦後逆に日本人という理由だけで石をぶつけられたという実体験から導き出された関係の反転の恐怖、自らや親族のアジアでの行為の償いなど、それぞれ自らの幼稚園経営の根幹をお話くださったのだと筆者は理解した。そのために、外国籍の子どもたちを積極的に受け入れて、親たちにも援助していきこうとなさっており、現在までそうされてきた。さらには、二度と戦争を起こさないように、戦争を行うことのないような人間を育てるために幼稚園を続けてきたのだと話されている方もおられた。

ま と め

以上、調査の結果をもとにして、北海道における外国籍園児の現在の状況をみてきた。これらの結果から、大まかに以下の点が指摘できよう。

- (1) 北海道においては、外国籍園児は道央部に集中して在籍しており、国籍は北朝鮮と韓国がもっとも多く、地域的にはアジア諸国が全体の7割を占めている。
- (2) 一口に「外国籍園児」と言っても、(a)日本で生まれ育った北朝鮮・韓国や中国の国籍をもつ園児と、(b)主に両親のステップ・アップのために他国より近年連れられてきた園児の二つの層がある。
- (3) (b)の層は家族による地域移動が多く、その移動には国内においてのものと国境を越えてのものと二種類がある。どちらにせよ、子どもたちは幼稚園の就園期間内では途中入園と途中退園を経験せざるを得なく、3年あるいは2年間同一の幼稚園に通園する場合はあまりない。
- (4) (b)の層の子どもたちにとっては言語の問題が大きい。周囲の日本語を母語とする子どもたちとの間の「言葉の壁」は、ある一定期間については確実に存在するが、子どもたち同士の創意工夫と先生方の工夫により大半の場合は打ち破られる。
- (5) 子どもにとっては、「外見の違い」と「言語の違い」は直結しやすいが、一人の人間の中で「外見が同じこと」と「言語が異なること」との共存は理解し難い状態であることが推測される。
- (6) 特に(b)の層の子どもたちに対する教育にとっては「縦割り保育」が有効性をもつことが示唆された。
- (7) 外国籍園児の教育にとっては、職場をはじめとした地域のサポートも重要な役割を果たしていたことが明らかになった。

最 後 に

本稿を支える筆者のパースペクティブは“北海道における共生は可能か”に集約できる。私たちが生活している大小幾つかの島嶼群から構成されている「北海道」と呼ばれる地域は、私たちは日常生活の中で意識することを遠ざけがちになっているのだが、その住民のマジョリティーが

北海道以外の島や大陸からの「移住者」であるか、もしくは「移住者」の子孫であるという特徴をもっている。つまり、住民の大多数はわずかここ百年ほどの間に北海道という島嶼群に、自ら望む望まないの相違はあろうとも、移住してきたという背景をもつ人たちである。それぞれ異なった文化をもっていたであろう人々は、毎日の暮らしのなかで、自らよりも先に居住していた人たちと自らよりも後に移住してきた人たちという時系列的な差異と、異なった文化の邂逅という共時的な差異のなかで、いかにして自らを保ってきたのだろうか。もし、そこに異なるものに対して排除を目指すのではなく受け入れようという緩やかな文化が培われていたのならば、北海道における現在の文化のなかに今なお残存していると考えことは甚だ突拍子もないことではないだろう。その特色こそが、北海道自身の独自性であると同時に、21世紀に向けて個々人に必要とされている文化の一側面であるのではないかと筆者は考えている。

具体的には、幼稚園のなかで外国籍園児がどのように発達を遂げているのか、外国籍園児と園生活を共にする「日本人」園児が日常の触れ合いを通してどのように発達を遂げていくのか、さらには実際に外国籍園児を教育する幼稚園園長及び教諭の方々や他の園児の親たちがその日常生活のなかで何を感じ、何を思い、そのことが自らの生き方にどのように反映していくのか、ということ明らかにしていくことによって、以上のあまりにも壮大な疑問にわずかでも近づけるのではないかと考えている。特に幼稚園の教育に着目するのは、各々の教育者が個人の発達段階におけるきわめて重要な時期に密接に関わり続ける個人であると筆者は考えるからである。

「共生」に関わる重要な職種の一つには医療従事者がいる。以前、ある看護専門学校で「在日外国人」に関するレポートを書いてもらったことがある。その中に、「外国人の多くはエイズだから、これ以上入国しないしてほしい」という趣旨のレポートを書いた看護学生がいた¹³⁾。その数は悲しむべきことに少なくはなかった。筆者は、リスクの大きい職場（いわゆる3K）で働かざるを得ない外国人が病気やケガをしたときに真っ先に出会う「日本人」は看護婦であるかもしれないという認識から、きわめて重要な職種の一つだと考えている。幼稚園教諭も同様な意味において重要な位置を占める職業であると考えている。先のようなレポートを書いたかの女たちはいわゆる「外国人」とこれまでの生活史の中で身近に接したことはなかったという。「外国人」との触れ合いの経験が、自らとは異なった容姿や文化をもった人たちを自らと同じ“人間”として認識できる重要な一要素だとするならば、本稿のもととなる「聞き取り調査」においてお話をうかがった幼稚園の先生方は毎日がその過程のなかにある。同時に、多数の「日本人」園児に自らの認識を伝える機会に満ち溢れた存在であると言えることができるだろう。このような認識が、特に幼稚園教諭にお話をうかがった理由である。ただし、一度限りお話をうかがうだけではあまりにも不正確であり、筆者が先生方の真の意図を本当に理解しているのかどうか大いに疑問があるところである。誤りや誤解は指摘していただければ幸いである。今後も継続的にお話をうかがう必要性を感じており、今後は幾つかの幼稚園においてフィールドワークを行うことによって理解の深化を目指すつもりである。

最後に、各幼稚園の園長先生や先生方にお話をうかがう中で、外国籍の子どもたちと接した経験の中から生まれた貴重な考えが各々の幼稚園にしまい込まれているように感じられた。それらの培われた経験や教育上の成果は今後の北海道における幼児教育のみならず教育全般にとってはきわめて重要な多くの示唆を含んでいることと思われる。本稿がその示唆のほんの一端でも明らかにすることが出来ていることを願って止まない。

（本稿は科学研究費補助金による研究成果の一部である）

《謝 辞》

本稿を執筆するなかで多くの方々にお世話になりました。ここに深く御礼申し上げます。特に、卒園式と新入园児を迎える準備と幼稚園のタイム・スケジュールの中ではもっともご多忙な時期であるにもかかわらず、筆者の要領の得ない質問に対して、わかりやすくお話しして下さった幼稚園の園長先生や主任及び担任の先生方に改めて感謝致します。また実際に子どもたちに出会う機会を設けていただいた幼稚園の園長先生をはじめとした職員の皆様方にはお手数をおかけ致して申し訳ございませんでした。そして、千早坦教授（静修女子大学）には幼児教育に関する多くの教示を受けました。また同教授のお口添えがなければ、多くの幼稚園の方々にお話しをうかがえなかったかもしれません。あわせて感謝致します。

— 註 —

- 1) 奥田道大グループによる地域に密着した調査研究をはじめとして、外国人の個々人の尊厳を第一に考慮された研究業績も日本国内には着実に蓄積されていることも記しておく。
- 2) 一園のみが筆者と話をすることを「うちには外国籍の子どもはいない」という理由で拒まれた。しかし、電話を通しての言葉から、長年にわたり日本国に居住していて国籍は外国籍となっている子どもが、この幼稚園に在籍している可能性があるようにも思われた。
- 3) 直接出会う面接調査と、電話というメディアを通しての調査で得られた各々の情報を同一レベルで分析することを筆者は良しとしているわけではない。電話で見ず知らずの人間を相手に話すのと、実際に一人の個人（例え初対面であっても）を目の前にして話すのとでは、話される内容に差異が生じているのは、自らの経験を振り返れば簡単に理解出来ることと思われる（情報論的に言えば送り手側がメディアを通すことによって情報統制を過剰に行うことをより可能にするのであろうし、対人関係論的に言えば実在としての他者が会話のコンテキストに影響を与えるというわけである）。本稿においては、以上の相違の重要性を認めながらも、実態の伝達を優先させた。
- 4) 本来ならば、幼稚園の規模と国籍別の分析や各々の地域毎の特色、そして園児個人の生活史に密接に絡まった分析がなされるべきであろう。しかし、本稿においては幼稚園や園児各個人が特定されることを回避するために敢えてそのような記述を見合わせた。本研究は、外国籍園児を「対象」として、北海道内の幼稚園に対して《糾弾》を目的としているのではない。そのような政治的理由に根差したものではないことは特に記しておきたい。
- 5) 図をご覧になれば、誰もが1969年に外国籍園児が急激に増加していることを奇異に思われることであろう。この年に急激に外国籍園児が増えた背景については、別稿を用意している。
- 6) 例えば東京都の学校基本調査報告書では毎年外国籍園児の人数が公表されているが（しかも各地区毎にまとめられている）、北海道においては公表されてはおらず、日本国内で見たような時系列的な比較は残念ながら出来なかった。
- 7) のべでは43人の外国籍園児がいたことになる。ただし、筆者がアクセスすることが出来なかった

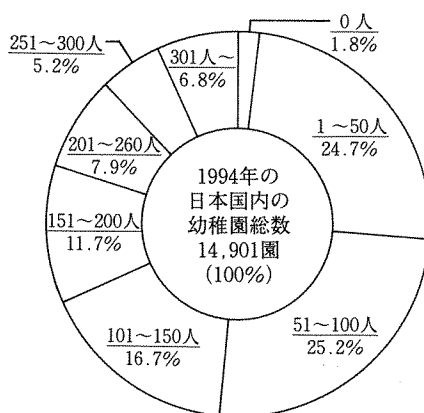


図3 園児数別の幼稚園毎の割合
(平成6年度学校基本調査報告書より作成)

幼稚園での増減が確実にあると思われるので、実際の人数はさらに増えると考えられる。

- 8) 平成6年度学校基本調査報告書によると、1994年5月1日現在北海道には606の幼稚園があり、内訳は国立2園、公立115園、私立489園となっている。
- 9) 参考までに、1994年5月1日現在において日本国内の幼稚園数は14,901園であるが、このうち園児が一人もいない幼稚園が273園あり（全体の1.8%）、在籍する園児の人数が1～50人の幼稚園が3,685園（24.7%）、51～100人が3,749園（25.2%）、101～150人が2,495園（16.7%）、151～200人が1,743園（11.7%）、201～250人が1,175園（7.9%）、251～300人が769園（5.2%）、301人以上が1,012園（6.8%）となっている（図3参照）。
- 10) 外国籍園児に関わらず、親がある特定の新興宗教を信仰している場合、幼稚園の行事に出なかったり、中には幼稚園をやめていったという話も調査の中で耳にした。
- 11) 彼はサハリンで生活していたときにひどい苛めにあったということだった。
- 12) 身体測定でクラス全員が一斉に裸になることをかの女が奇異に感じるのももっともであろう。一方で、子どもたちに対する虐待の有無を調べたり、背骨が曲がっていないかどうかのチェックをしたりと、裸になることが単なるルーティーンではなく、ある一定の働きも果たしている事実も指摘しておきたい。
- 13) ごく当たり前のことではあるが、「外国人」を自身と同じ血の通った“人間”と見なしたうえで、今後の日本社会に対する重要な提言を記している看護学生もいた。この相違は、あくまでも推測に過ぎないが、レポートの前半部に記されたかの女たちの生活上の経験に由来すると思われる。すなわち、幼少時に外国人一家が近所に越してきて家族ぐるみで仲良くした経験をもっていたり、勤務していた病院でもっとも信頼されていた医者が日本で生まれ育った外国人だったなどという、実際の個人として出会い空間を共有していた／人たちは、「外国人」を単なる《記号》としてみたり、忌むべき存在としての視点の固定化などはない。筆者は、先の園長先生方の戦時中の体験を今なお心に秘めながら、長年の間幼稚園を運営されてきたという話を思い出す。